

## 対話力を育む多言語・多文化共生日本語教育 ー教育実習における実習生の「語り」分析ー

古市 由美子

学位取得年月：平成 18 年 9 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】対話力、多言語・多文化共生日本語教育、教育実習、語り、意味づけ

【要旨】

本研究は、多言語・多文化共生日本語教育を標榜して行われた教育実習を取り上げ、実習生が新たな理念である共生日本語教育にどのように対峙し、どのように意味づけたのか、彼らの「語り」から学びの実態を解明することを目的とし、以下の 5 つの研究を行った。

研究 1 と研究 2 では、共生日本語教育実習と日本語教育実習を対比し、それぞれの実習で実習生が何を意味づけ、実践能力をどのように捉えたのか、実習報告書の内省レポートをデータとし、GTA を援用して分析した。その結果、いずれの実習においても、①実習理念、②授業実践、③リソース、④自己認知、⑤研究を意味づけたが、その割合や内省の深さや広がりとは異なっていた。また、それぞれの実習生は共生日本語教育実習では＜対話力＞を、日本語教育実習では、＜実践的教授力＞を実践能力として意味づけた。

研究 3 では、実習準備期間に、実習生が何を意味づけたのかを、実習生が書いた内省レポートをデータとし、GTA を援用して分析した。その結果、実習生は①共生理念、②自己認知、③リソース、④協働実践を意味づけた。経験者、未経験者、母語話者、非母語話者など実習生のこれまでの背景や経験によって、共生日本語教育の意味づけは異なるが、いずれも「他者と向き合い関係を結ぶ中で、自己を発見し、自己変容させる力（対話力 1）」が育まれたことが示唆された。

研究 4 と研究 5 では、共生日本語教育実習終了後、実習生が共生日本語教育をどのように意味づけたのか、また教師の役割は何かを、インタビュー・データを用いて分析を行った。実習生の「語り」を分析した結果、母語話者実習生は、共生日本語教育を＜日本語を教えない日本語教育＞、＜周辺的な日本語教育＞、＜地域を結ぶ日本語教育＞と意味づけ、個々の経験によって 3 つのパターンが示された。一方、非母語話者実習生は、①認知面、②情意面、③社会面における役割を意味づけた。これらの結果から、母語話者・非母語話者実習生は、「他者との関係性を再構築し、自己をとりまく世界を変革していく力（対話力 2）」が育まれたことが窺えた。

以上、共生日本語教育実習における実習生の「語り」から、対話力が育まれていることが明らかになった。この対話力は、主に準備期間中の協働実践によって対話力 1 が、授業実践によって対話力 2 が育まれたことを実証的に解明した。

（ふるいち ゆみこ）